

水野清一君及び長廣敏雄君の「雲岡石窟第八洞第九洞」に対する

授賞審査要旨

山西省大同の西郊雲岡鎮の石窟寺は西曆第五世紀北魏の文成・献文・孝文三帝によつて逐次開鑿された中国に於ける最大にして且つ最古の石窟寺である。この遺蹟は一九〇二年(明治三十五年)本院会員伊東忠太博士によつて初めて世界に紹介され(支那山西雲岡の石窟寺「国華一九七一—一九八」)、次いで一九〇七年フランスのシャヴァンヌ博士もその踏査を試みた(Mission archéologique dans la Chine septentrionale, Tome 1, 1909)。爾来内外学者の此地に足を入れるもの漸く多きを加え、北京在住の写真師の營業的撮影に赴くものも少くなかつた。雲岡石窟寺は周知の如くアジア大陸を連貫する他の石窟寺と共に仏教芸術東進を語る重要史蹟であつて、ガンダアラ・中インド・中央アジア等西方の要素を包含し、之に中国固有の要素を加えて所謂北魏式芸術を樹立し、延いては朝鮮三国時代を経て我国飛鳥時代の芸術の祖型をなしたものである。従つて之が世界の重要文化財であることはいうまでもないが、我國の芸術にとつて特にその重要性の痛感されるものがある。本遺蹟は中国に於ける他の石窟寺が崩壊の一途をたどるに比べて保存の程度は幾分良好といえよう。併し乍ら石窟を構成する砂岩の崩壊し易きに加えて、奸悪な骨董商の人工的破損も免かれない。吾人は此等破壊の悲運を想うとき、洵に寒心に堪えないものがある。

従来内外学者の本遺蹟に対する研究調査の態度を顧ると、主として美術史的立場から行つたもので、勿論その業績

の大なることは学界の均しく認めるところである。唯各人の取材が略一定し、広大な石窟内に間隙なきまでに施された彫刻の一局部に限られた観があつて、雲岡大小幾十幾百の洞窟個々に対し基本的考古学的調査を行つたものが無かつたのである。水野及び長広両君のこの事業はまさに此欠陥を補うに足るものといふべきである。

本事業は一九三八年(昭和十三年)から一九四四年(昭和十九年)まで前後七回に亘り、毎年三月乃至六月を現地にて費し、宿舍食事等の不便を忍び、あまつさえ調査に必要な器具資材等の不足をも克服して本遺蹟の主要洞窟の基本的調査に多大の実績を挙げた。即ち広大な主要洞窟の四壁各層・各龕・天井等につけて、本尊を始め仏菩薩・飛天乃至は図紋の細部等夫々之を写真に収め、之に応じて詳細な記録を作り、殊に作業困難な壁面実測を敢てし、苟も北魏彫鑿の痕を留めるものは悉く之を網羅し、一には今後雲岡石窟を研究する者に充分な資料を興え、又一には将来崩壞の危険を免かれない主要遺蹟を紙上に移して保存するものといつても過言ではないのである。本事業の成果はここに五年を期し、本文十五卷図版十五卷合せて三十冊の大著として公表されることとなり、先ず第五卷雲岡石窟第八洞及び第六卷雲岡石窟第九洞の刊行を見た。吾人は以下両巻の内容を検討し、以て近き将来に完遂する報告書の全貌を察することとする。

雲岡石窟卷五第八洞 本文序章に於て「雲岡石窟の調査概観」と題して調査の方針・経過等について記している。本書が全体を通じては第五卷であるが、出版が最初であるので、此巻に於いて之に言及したのである。第一章から第五章に至るまで、第八洞の前室・主室北壁・主室東西壁・主室南壁及び主室天井の各部についてその規模並にそこに彫刻される各仏像・諸図紋等を縷説し、更に終章として此洞の特徴を概括している。著者は第八洞が之と隣接する第七

洞と共に初から雙窟として開鑿されたものであることを明かにし、此両洞の本尊は当然之を各主室北壁に求むべきであるが、両洞共に一主龍・一主仏というではなく、數龍に或は釈迦像を或は彌勒像を彫刻し、後世の如く圖像學的儀軌に捉えられないことは、ガンダアラ・中央アジャ等に於いてその類例が認められ、その他仏菩薩の容貌・服制等にも、又壁間に見られる塔・柱等の形式や連華・唐草等の図紋にも、西方要素が濃厚に漂うている。此間もとより帳幕・獸面飾・龍文等中国伝統の要素も表現されているが、後者が前者に比して頗る稀薄であることは、第八洞が第七洞と共に、文成帝の時雲岡に創めて開鑿された所謂曇曜五窟と孝文帝太和十年前後に竣工した第六洞との中間、即ち献文帝の時代に置くべきものと考察している。

雲岡石窟卷六第九洞 本文序章として「雲岡石窟の系譜」と題し、先ず雲岡石窟の芸術的系統を尋ね、甘肅省敦煌を始めとし中央アジアのキジル・アフガニスタンのバミアン・ガンダアラ更に進んでインド内地の寺院一一の特質を挙げ、その異同を比較しつつ之を雲岡石窟に対照し、その結論として、第一期(西暦前二百年―後二百年)に於いてインド内地に洞口のみに裝飾を施した小規模の塔廟窟が作られ、その後石窟寺の開鑿は一旦中絶していたが、西暦後二百五十年頃から再起し、第二期即ち西暦五世紀に及んで石窟内に盛んに仏菩薩その他の裝飾を彫り付ける形式を生じ、インドからアフガニスタンへ、更に中央アジャから敦煌へ、終に東して雲岡に伝つたのであるとし、なおその間に直接アフガニスタンから又インドから伝つたものも否定出来ない。例えば雲岡大像窟とアフガニスタンのバミアン大像窟との類似、又雲岡列柱前室とインド列柱前室との類似の如きがそれである。要するに雲岡石窟の工人はインドから次第に東漸した石窟形式を採用したが、又直接に遠くインドの新形式をも取り入れ、ここに選択もあり獨創もあ

つて、何処にも似ない雲岡独特のものが出来たのであると論じている。著者が本巻の序章に於いて石窟の系譜を述べた意図は、本巻も亦早期に刊行され、且つ雲岡石窟の裝飾がインドのものに比してあまりにも彫刻的であり、又中央アジア以西のものに比べてあまりにも木造建築的であるその特徴が此第九洞及第十洞に於いて著るしく表現されているからであらう。第一章から第三章まで前室並に主室の規模、四壁・天井等各部に亘る仏菩薩その他各裝飾について詳述し、終章に於いて第九洞の特徴を概説している。著者は第九洞がもと第十洞と共に雙窟として開鑿されたものと考え、その本尊が主室北壁にあつて仏菩薩三尊形式を取つてゐるのは、雲岡石窟中唯一の例であることを指摘し、更に本洞の仏菩薩と天人童子その他本生談等を表わす彫像や仏龕・柱栴等の形式乃至は蓮華・パールメット等の図紋などについて精細な考察を加えた後、第九洞は中国式木造建築に擬して華やかに修飾されているが、彫像が曇曜五窟や第八洞の力強きに及ばず、さりとて孝文帝太和十年頃に作られた第六洞の全く革新的なのに比べると、随所に西方的北方的要素が横溢しているから、第九洞の開鑿年代は第八洞の直後にあつて、第六洞に先行する孝文帝太和初年（後四百八十年頃）に置くべきものと推定している。

最後に本書の図版について一言すると、或は遺蹟の全貌を写し、或は彫像の細部を明かにし、その鮮麗にして、しかも技術に妙を得ていることは、巻末の図版解説と相待つて懇切に遺蹟を説明している。由来此種の報告書に図版のもつ役割のいかに重大であるかは周知の如くであるが、本書の図版の如きよくその使命を全うしているものといえよう。本報告書全巻の完了した暁には、事業そのものは勿論、三十冊の大著は近來稀に観る豪華版として世界の注目を引くことであらう。唯雲岡石窟寺の仏教學的研究については学者或はその所見を異にするものもあらう。又その芸術

的系統についてもなお考慮を要するものもあろう。併しながら此種の基本的考古学的調査は遺蹟を徹底的に調査し、且つ之を正確に報告することを主眼とするものであり、しかも著者の見解の頗る穩妥であることは、本書が調査報告書として完璧に近く、雲岡石窟の研究に確固たる基礎を置く世界的大著といふべきである。